



福祉国家への道

綿貫哲雄

イギリスは社会保障制度のきわめて美事に発達している国で、「ゆりかごから墓場まで」一人一人の国民の生活について、親切な顧慮が払われている。ところがそのイギリスが、福祉国家のモデルとして一目おいているのがスエーデンである。

スエーデンは、人口六百五十万の小国であるが、地上の楽園として、世界中の人々から敬愛されている。曾ては戦前の日本のように、軍国以外の何ものでもないというほどの強大な軍隊をもち、戦えば、すなわち勝ち、一等国を誇つたのであつたが、一敗地にまみれて領土の大半を失い、にわかには三等国に落ちてしまい、食うや食わずのどん底に陥つたのを転機として、今までの非をさと、軍隊は真に自衛のためだけの小さなものにとどめ、文化的な一等国を目ざして再建をはかつた。すなわち亡国の瀬戸際まで追い込まれた時、「外で失つたものを内で取返そう」と、軍国主義を一抛して、民主・文化国家の理想の下に、教育と政治の一大革新を断行したのである。この国には、今では巨大な財閥・富豪もなければ、貧民窟もない。豪農もなければ小作人もない。農民は何れも自作農として一町歩以上の土地を耕している。産業組合・消費組合が全国的にひろがり、国民はおおむね中流の生活を営み、ひとしく文明の恩恵をうけている。法により定められ補助されている各種の社会保険があつて、病氣や失業や老後の心配もなく、誰でも自転車ぐらゐは持つているが、それを戸外に乗り捨てておいてもなくならないし、夜も戸締をする必要がない。ま

さに「落ちたるを拾わず」とはこのような国のことだろう。都会生活では、ほとんど戸毎に電話や電気冷蔵庫ぐら
いは備えつけ、ヨットや別荘を持つているなどという家も少なくない。服装などでも、大臣も職工も余り差別がな
く、誰もがさつぱりとした、きちんとしたものを着ている。

2

日本国もこのたびの敗戦を転機として、軍国主義を一抛して民主・文化国家の理想の下に祖国を再建しようとして
いる。新憲法では、もう軍備などはしないと高らかに宣言している。また「すべて国民は、健康で文化的な最低限度
の生活を営む権利を有する。国はすべての生活部面について、社会福祉・社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努
めなければならない」という、旧憲法には全く見られなかつた規定を設けてもいる。そして生活保護制度を実施して、
最低生活を営むことの出来ないものを扶助し、また社会保险制度を実施して、疾病・傷害・出産・癩疾・死亡・老
齢・失業などにそなえ、いざという場合にはその生活を保障することとなつた。しかしいかに「紙の上の憲法」で
はそれらが立派に歌われていても、日常生活すなわち「活きた憲法」に具現されないでは国民は仕合せにならない。
平和な文化国を目ざして日本は再建されるのだと高らかに宣言した新憲法さえも、あれは間違ひだつた、日本はいま
一度武装すべきだなどということであつたり、せつかくの社会保障制度も個々の場合の必要に依じて応急的につくら
れたもので一貫したところがないし、またその保障されている生活水準がはなはだ低い。家がないのも、失業するの
も、病氣して治療できないのも、本人の日頃の心がけが悪いからだと軽く片づけてしまつた以前の時代に比べれば、
ともかくもこうした制度が実施されるに至つたのは一大進歩には違ひないし、また以前には社会主義者と云えば非国
民、逆賊よばわりされたのに、こうした社会主義政策が取上げられるに至つたことには隔世の感なきを得ないのであ
るが、しかしその社会保障なるものは、イギリスが二十八、アメリカが四十九、西ドイツが二十六、フランスが二十

三だとすると僅かに二の比率にしか過ぎない。病氣や出産で生活に困るものは、イギリスでは五十一日、スエーデンでは四十八日、イタリアでは二十六日、西ドイツでは三十二日間の生活が保障されるのに日本では僅かに五日でしかない。老人や遺家族が、スエーデン、アメリカ、西ドイツで受ける生活保障金が五十以上であるとすると、日本は僅かに三であるという実情であつて、福祉国家への道ははなはだ遼遠と云わねばならない。

3

最近「自由国家群」という言葉が用いられ、日本は英米等と共に、これに属するもののように一般に考えられているが、そもそも自由国家とはいかなるものか。個人の自由が何よりも尊重されている国家ということであろうけれども、この自由という言葉は、いかにも美しい響を与え、最も愛好されておりながら、その意味が明確にされていない。中共は自由国家でなく、したがつて中共治下には自由がないと云われている。いかにもそこでは毛沢東や周恩来の批判は出来まいし、言論報道の自由が制限されてはいる。これに比べると日本では、どんなにでも政府を批判したり、首相を非難することの自由があるし、政府や首相の方には馬耳東風で、これに全く耳をかさぬ自由があるからといつて日本は自由国家だと云えるだろうか。上海や北京のデパートに比べると東京や大阪のデパートにははるかに上等な品物が沢山に並んでいるとしても、たれでも自由にそれが買えるとは限らない。白屋若いものが街のパチンコ屋で時を空費したり、夜の電車の中で泥酔して高歌放吟する自由が日本にはあるが、中共治下にはそうした自由がないということ、日本は自由国家だと云えるだろうか。政府の高官や政党の幹部に汚職をする自由があり、それを糊塗するために指揮権を發動する自由があるからといつてそれが自由国家だろうか。

自由という言葉の最も普通の用例は否定的であつて、束縛のないことを意味する。しかし自由は束縛されないことだとしても、社会の秩序は、多少の度において束縛を意味するのであつて、全く束縛がなく、めいめいが勝手気まま

をするとしたら、真の自由はあり得ない。自由は実に社会秩序の中で、またその秩序の發達の度に応じて實現されるのである。そこで自由の意義を明確にする上に最も有益な考え方は、われらの経験に訴えて、現状はどうかというのと、それはいかに在るべきか、在り得るかということの二つの状態を比べて見ることである。この意味で、「自由は機会 (opportunity) だ」と説いたトマス・ヒル・グリーンの思想に学ばねばならない。すなわち個性の眞の發達の機会が与えられておればおるほどそこに自由が存するのである。そして人生の理想は不斷に進歩するから、その機会はそれに適応したものでなければならぬ。

この見地に立つ時、自由は良い家庭を意味し、善い教育、善い政治を意味する。だから例えば細民窟 (slum) のような不健全・不道德な環境に生まれ、しかも十二、三歳で早くも人間精神を狭い溝に押し込めて殺してしまふ苦役に従わねばならぬような境遇から脱し得ない哀れな幼いもの、かれらは著しく自由を失つていたのである。そして個性の發達に役立つ機会は無限にあり、これを追跡すればするほど不可視の世界からその姿を現わして来るのだから、これを一挙に捉えることは出来ないし、また捉え尽すことは永遠に出来まい。この意味で自由は理想であり、過程である。われらは既にその或るものを捉えた、実にわずかに或るものを捉え得たに過ぎない。だからわれらの社会は自由であり、また不自由であるのだ。

われらの日常生活で、普通に「善」と呼ばれているものは何か。幼いものには善い遊びを、若いものには良い教育を、成人には良い家庭と良い仕事を、そして老人には平和を与えることではないか。要するにあらゆる個人により善く生きる機会、換言すれば、よりよく個性を發揮し得る機会を与えることではないか。では、「進歩」と呼ばれるものは何か。教育・政治・宗教・産業、およそ人間生活のあらゆる面に於て、その制度や組織が個人の自由を保証し、それを發揮せるようなものであることではないか。して見れば善と云い、進歩と云い、また自由と云う、すべて別物ではない。けだし善は種々な形相を取つて現われているのであつて、自由は進歩の個別面であり、進歩は自由の集合

面で、共に善の現われに外ならない。だから個人の自由を意味しない進歩は真の進歩でなく、社会の進歩の一部でない自由は真の自由でない。では何が善であり、進歩であり、自由であるかを個々の事象に就いて決定するものは何か。それは不断の錬磨を要する叡智の外にはない。あたかも美を判断するのが洗煉された美意識であるように。

日本国憲法は、「すべて国民は個人として尊重される。生命・自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で最大の尊重を必要とする」と規定して、自由をきわめて重く考えていると共に、公共の福祉を以てすべての個人にとつての最高の目標として掲げている。個人の自由といえども、公共の福祉という枠の中でのみ許されているのである。しかし社会の進歩と個人の自由とが決して矛盾するものでなく、何れも善の現われに過ぎないように、真の公共の福祉と個人の自由とは矛盾するものでない。ただ自由の美名の下に公共の福祉が脅かされることがあり勝るので、このような限定を加えているのであるが、他面、公共の福祉の美名の下に個人の自由が無視されることもしばしばあるから、国民は常にこれを監視し、また厳正に批判しなければならぬ。自由国家、福祉国家、または民主国家などと呼ばれているが、それは要するに、国民のすべてが誰彼の差別なく、生き甲斐を感じ、喜びに満ち溢れて日々の生を営んでいる国家、すなわち幸福な国家ということなのである。

4

人類は生活の各分野において、それぞれ規準を設け、この規準に達しないものを、悪・罪・病等・一般に「頹廢」(Degeneracy)と呼んでゐる。Degeneracy は語源的にも、「規準以下」を意味している。頹廢分子には、医学的や法律的に証明できるものがある。白痴や犯罪者の如きはそれである。しかるに欺瞞・利己・放縱というような、はつきりと証明することのできないものもあり、この方が、社会にとつてはむしろ有害なのである。前者は記号づけ、隔

離し、特別な処置の下に置くことも出来るけれども、後者は記号づけられるにはあまりに伶俐・狡猾であり、傲然として一般人の間に往まつていて、家庭には不良の子孫を残し、社会には害毒を流す。

社会の事象には、すべて歴史があり、複雑な原因がある。だから、これを軽率に偶然と見たり、単一な原因に帰したりしてはならない。一つの「悪」でも、これを救おうとするからには、その環境のあらゆる方面が顧慮されねばならない。また一見何のつながりも無いように見える諸悪も、有機的に關聯し合っている。だから、社会の改善は、一、二のものだけで出来るものでなく、あらゆる方面の協力によつて、環境が改善されることに待たねばならない。また個人の罪か、社会の罪か、というようなことはほとんど無用の論議であつて、すべて個人の罪でもあり、社会の罪でもある。さらに、世間では、例えば犯罪者と云えば、どうして罪を犯したかを知ろうとするよりも、まずこれを非難する。しかし真にこれを救おうとするならば、かれらに対する眞実な理解から出發せねばならない。すなわち、まず同情的でなければならぬ。その時、かれらもまたわれらと同じような人間であるのだ。それを別人類視することの不当であり、一般に無益であることに心づくに違いない。古今の偉大な博愛家は、かれらを非難するよりも、かれらのためにいつも言訳を見出したのであつた。

5

むかし聖者ピーターは世の腐敗を歎き、ローマを捨てて去ろうとした時、道にキリストの幻が現われて、「何処へ行く！ 汝ローマを去らば、われ代りてローマに行き、いま一度十字架にかかるべし」と告げた。かれはこの声に驚いてローマに引返し、ついに教に殉じた。また漱石は、人の世を作つたものは、神でもなければ鬼でもない。やはり向こう三軒両隣りにちらちらする唯の人である。唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて越す国はあるまい、あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくからうと云うた。

いかにこの世が住みにくいからといつて、それを捨てて何処へ行く。住みにくい処をどれほどでも寛げて、住みよい世にせねばならない。この世の中を住みよいものにするには、種々なる方面が顧慮されねばならない。またあらゆる方面の人々の協力を俟たねばならない。殊に根本的なことは、「人間」に対する理解または認識である。人間は神でもなければ動物でもない、或いは神でもあり動物でもあると云つてもいい。すなわち歴史の中で神のような美しさ、勇ましさをも現わしているけれども、家禽野に放てば野獣となるといふ言葉があるが、時として野獣のように衝動のままに動く。

（本学科旧師）